

| | | | |
|---|---|------|----|
| 授業科目名 | 水環境論 | 単位数 | 2 |
| 担当教員名 | ほやの はつこ 保屋野 初子 | 担当形態 | 単独 |
| 実務内容 (実務家教員の場合) | 環境ジャーナリストとして国内外での取材活動をもとに記事、著書、講演などを通して環境問題のなかでも水問題（ダム開発や水道問題など）の現場とその背景を伝える調査報道、および編集者としても多くの雑誌、書籍の製作に関わってきた。仕事の傍ら大学院修士課程・博士課程で研究を行い、修了後に大学で授業をもつようになり今日に至る。社会貢献活動では、小規模水道を支援する NPO 法人の立ち上げと運営に関わり、公益財団法人日本自然保護協会理事も務めた。星槎大学では、環境社会学、水環境論のほか沖縄県北部やんばる地域での演習、長野県小谷村での里山体験実習を実施している。 | | |
| 「学位授与の方針」との関係 A、B、C、D、Eと深く関連している。 | | | |
| 授業の到達目標及びテーマ (1) ヨーロッパで河川再生という考え方・手法が採られるようになった背景、経緯、取り戻そうとしているものは何かなどを理解する。 (2) 川の管理に関する政策転換において、NGOや市民、専門家が果たした役割を理解し、合意形成のあり方について議論することができる。 (3) 地球温暖化への対応、川本来の機能回復のための「川に空間を与える」という考え方と技術を理解し、今後必要となる新しい川づくりの考え方と具体的なやり方を知っておく。 (4) 日本の川の管理の現状と課題を知り、これからの水環境政策は、どのような考え方と手法を採るべきかについて、各自が考えをもち他者と議論できる。 | | | |
| 授業の概要 かつて日本が近代的な川づくりを学んだヨーロッパでは、自然と共生する新しい川の管理「河川再生」が進んでいる。これを題材に、めざすべき水環境政策について各自が考え議論できるようにする。具体的には、現在のヨーロッパの水管理を基礎づけた、オランダ、ドイツ、オーストリアにおける河川再生の考え方や手法を、ライン川、ドナウ川などの流域での実践例を通して基本的考え方と知識を習得する。それは、洪水を工学的に制御する手法のみに頼ることを脱し、水辺の動植物を含めた生態学的な知識を取り込むことで自然が本来もっているさまざまな機能を発揮させるものといえる。たとえば、かつて川が氾濫していた場所にもう一度洪水が流れるようにして洪水リスクの軽減や地下水の涵養、水質浄化といった複数の目的を同時に果たす氾濫原再生がある。こうした自然との共生的な水管理とともに、政策転換を可能にしたNGOや市民の役割、行政計画への住民参加の経過や仕組みについても学び、利害関係が異なる関係者間での合意形成の事例から、社会的な共生がいかに重要かの理解を深める。そのうえで、日本の川の管理が依然として人工構造物に頼る手法にとどまっている問題に気づき、人間社会と自然との共生、社会の中での共生に向けて、私たちがどう考え、具体的にどう行動していくかについて考え議論する。 以上について、アクティブラーニングの手法も用いて実施している。 | | | |

授業計画 ()内は対応するテキストの章

第1回：なぜ、ヨーロッパでは河川の再生が行われているのだろう (第1章)

第2回：オランダにおける合意形成とは (第1章)

第3回：川はどう近代化されてきたのか (第2章)

第4回：ヨーロッパ人にとっての氾濫原 (第2章)

第5回：NGOと専門家が政策転換に果たした役割 (第3章)

第6回：生態学を採り入れた新しい水管理 (第3章)

第7回：自然への譲歩という新しい戦略 (第4章)

第8回：地球温暖化への河川政策の対応 (第4章)

第9回：氾濫原を再生するードナウ氾濫原国立公園 (第5章)

第10回：オーストリアとドナウ川流域の先進的取り組み (第5章)

第11回：都市政策に河川再生を組み込む (第5章)

第12回：水政策を統合する法律をつくるードイツ、EU (第6章)

第13回：日本の河川政策の現状 (第7章)

第14回：日本で自然再生の可能性 (第7章)

第15回：日本の水政策をどう変えていったらよいか (第7章)

定期試験

スクーリングでの学修内容

(主に、シラバスの授業計画の第1回～第11回までの内容を含む)

シラバスの「授業計画」の第11回までの学習内容をふまえ、なぜヨーロッパ諸国で河川再生という考え方が生まれ実践が始まったのか、主として誰がそれを望みどんな活動を展開したのか、その結果どのような新しい川の見方や管理方法が実施されるようになっていったかなどについて、講義で具体的事例を挙げながら確認し感想や意見を述べ合う。また、日本の川の管理の現状について近年の水災害の事例も検討しながら、川や水環境に対する日本とヨーロッパの政策の違いについてグループディスカッションし発表する。最後に、「水環境にとって、なぜ川の再生と住民参加が重要なのか」を全員で話し合う。

教科書

(1) 保屋野初子『川とヨーロッパ河川再自然化という思想』築地書館

参考文献

(1) 高橋裕『河川にもっと自由を 流れゆく時代と水』山海堂

(2) 藏治光一郎編『水をめぐるガバナンスー日本、アジア、中東、ヨーロッパの現場から』東信堂

(3) 嘉田由紀子編著『流域治水がひらく川と人との関係 2020 年球磨川水害の経験に学ぶ』農文協

学生に対する評価

スクーリング評価 (25%)、レポート評価 (25%)、科目修得試験 (50%) を総合して評価する。